

街路の視覚的、空間的要素からみるイメージ要因分析に関する研究

明星大学理工学部土木工学科 学生会員 米川光政

明星大学理工学部土木工学科 正会員 西浦定継

1.背景と目的

街路は、その歩行者に対して何らかの印象を与える。このことは、街路空間に個性（イメージ）が生じているものであると考えられる。そこで実際の街路を歩行する人のイメージを把握し、街路のイメージからの分類化を行う。そして類型化された街路の個性が、何に起因するのかを明らかにするために、その街路の色彩などといった視覚的な特質、また、景観要素などの街路の空間的な特質を調査し、街路の個性と景観要素の関係を把握する。

2.方法

1) 街路のイメージによる類型化

景観的にその特徴が顕著であると思われる 15 街路について歩行者の持つイメージを把握するために、通行中の人あるいは通行した人に対して記述式のアンケート調査を行う。対象はその街路を歩行中、もしくは歩行し終わった人とし、各街路につき 30 人をランダムに選出した。そのアンケート結果から、因子分析を行い街路の類型化を行った。

2) イメージと街路の空間的構造

イメージから類型化された街路の景観要素、植栽の種類や配置を挿入した断面図、平面図を作成し、街路のイメージとの因果関係を考察した。

3) イメージと沿道建築物の色彩

街路のイメージから類型化された街路と視覚的構造の色彩の因果関係を調べるために、イメージから分類された街路の沿道建築物（外壁、壁面看板、看板、ファサード）の色彩調査を行った。採取した色彩を数値化し色彩の分布を示し、街路全体の色彩分布を把握した。また、人の目を引く「誘目性」に着目して建築物の最高彩度を把握し、外壁、壁面看板と看板の誘目性を図と地を考慮して関係を考察した。

3.結果と考察

1) 街路の分類化の結果

15 街路をサンプル、アンケート結果を変数として因子分析を行った。分析結果は表 - 1 が示すような分類が

できた。歩行者に落着かないイメージを抱かれた街路は、駅から伸びる街路の駅前街路であった。駅前街路には街路景観に個性やまとまりがないため、せわしない雰囲気などがイメージとして残ってしまうと考えられる。

2) イメージと街路の空間的構造

イメージから類型化された街路の代表を篠原ら（土木学会編（1995））既存研究の結果のもとに街路構造の観点（街路幅員と沿道の建物高さの比：D/H）から考えると、D/H = 4 以上では囲繞感を感じられない、D/H = 1 ~ 1.5 付近に均整がある、D/H = 1 ~ 3 程度では心地よい囲繞感が存在すると考察できる。

- 落着かない街路（新川通り）：D / H = 6.7 ~ 1.1
- 落着く街路（絵画館通り）：D / H = 5.8
- 日常的な街路（市役所通り）：D / H = 4.4 ~ 0.6
- 非日常的な街路（大学通り）：D / H = 14.2 ~ 1.1
- 都会的な街路（市役所）：D / H = 4.4 ~ 0.6
- 歴史的な街路（蔵造り通り）：D / H = 3.2 ~ 0.9、D / H = 2.8 ~ 0.9

以上より、結果が特徴的な大学通りを見てみると、D / H は、歩行すると最低でも均整とれ、囲繞感を感じさせない街路となる。

また、歩道と車道の間には景観要素の植栽のスペースがあり、そのスペースには桜、銀杏やもみじなどが植えられてあり、歩道の反対側に向ける視線を遮っている。この

表 - 1 分類結果

グループ	通り名
落着かない街路	新川通り 立川北口大通り 志木街道 桑並木通り
落着く街路	絵画館通り 青山通り 馬車道 市役所通り
日常的な街路	市役所通り 立川北口大通り 横須賀中央駅前通り 志木街道
非日常的な街路	銀座通り 国際大通り 新川通り 大学通り
都会的な街路	市役所通り 新川通り 銀座通り 国際大通り
歴史的な街路	若宮大路 蔵造り通り 志木街道 表参道

キーワード；街路のイメージ、色彩、街路景観

連絡先；191 - 8506 東京都日野市程久保 2-1-1 明星大学 TEL042-591-9791

植栽は春には桜、秋には銀杏やもみじが季節感を醸し出し、片方では人工的な建築物が立ち並ぶことが非日常的

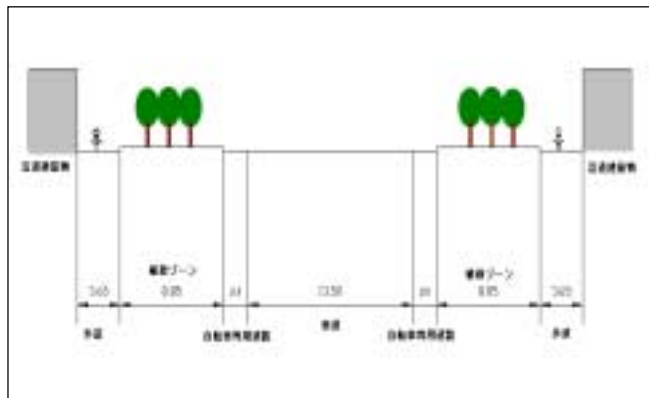


図 - 1 大学通りの断面図

なイメージに起因すると考えられる。

3) イメージと沿道建築物の色彩

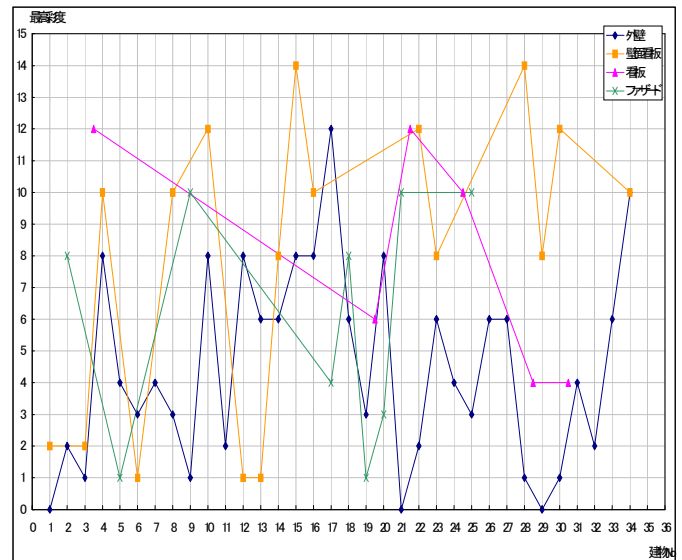
イメージから類型化された街路の代表を沿道建築物の最高彩度で見ると、

- 落着かない街路(新川通り): 対象物全てにおいて最高彩度である 14.0 が存在した。
- 落着く街路(絵画館通り): 外壁と壁面看板の最高彩度は、高彩度の 12.0 と 14.0 であった。
- 日常的な街路(市役所通り): 壁面看板、看板とファサードは最高彩度が 10.0 以上であった。それに対して外壁の最高彩度は 6.0 であった。
- 非日常的な街路(大学通り): 対象物全てにおいて最高彩度である 14.0 が存在した。
- 都会的な街路(市役所): 壁面看板、看板とファサードは最高彩度が 10.0 以上であった。それに対して外壁の最高彩度は 6.0 であった。
- 歴史的な街路(蔵造り通り): 対象物全てにおいて最高彩度は 10.0 以上であった。

特徴的だった新川通り(川崎区)と蔵造り通り(川崎市)に対する歩行者のイメージは、落着かない街路と歴史的な街路である。ここで、図と地を考えると外壁は地となるべきものであり、看板や壁面看板が図となるべきものである。しかし、両通りにおいて外壁が看板壁面看板より誘目性が高いものが存在し、色彩において統一性やまとまりに欠けていたが、蔵造り通りは沿道建築物が蔵造りで統一され、街路空間にまとまりを与えている。

一方の新川通りでは沿道建築物の構成でも統一性に欠けており、まとまりが存在しない。色彩を調和させることでまとまりを感じさせることが有効であると考えられ

る。色彩調和を考える上では Moon と Spencer 色彩調和



の式に、図と地を考慮して考える。

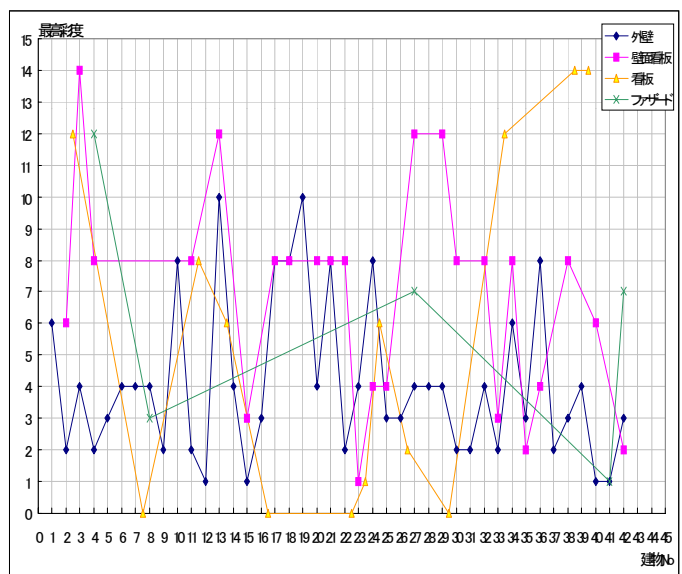


図 3 蔵造り通りの最高彩度
図 2 新川通りの最高彩度

4. まとめ

- 1) 歩行者の街路に対するイメージ調査から、イメージによる街路の類型化を行うことができた。
- 2) 歩行者が街路に対してイメージを抱くのは、植栽などの街路を構成する要素の統一性や個性に起因することがわかった。

[参考文献]1) 藤居良夫・酒井裕一(2002)「街路景観評価に対する因果関係の分析」, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp1045 - 1050、2) 黒田乃生・羽生冬佳・下村彰男(2000)「街路景観における植栽の配置構成とその評価に関する研究」, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp961 - 966、3) 境井雅章・大坂谷吉行(2000)「室蘭市の都市景観における建築物外壁の色彩に関する研究」, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp679 - 68、4) 土木学会編(1995), 「街路の景観設計」, 技報堂出版